

資 料

大学生の独自性欲求の類型化に関する研究

宮 下 一 博*

A STUDY ON NEED FOR UNIQUENESS IN ADOLESCENTS

Kazuhiro MIYASHITA

The purposes of the present study were to explore the possibility of typing 'need for uniqueness' proposed by Snyder and Fromkin, and to examine the characteristics of these types. New items measuring need for uniqueness, the Japanese version of the need for uniqueness scale developed by Snyder and Fromkin, and the mental set scale for creativity by Mishima et al. were administered to 224 university students. By means of various statistical analyses, a new reliable and valid scale for measuring need for uniqueness (Uniqueness Scale) was constructed. In accordance with this scale, 'need for uniqueness' was divided into four types : (a) going my way (calm) type ; (b) repressed type ; (c) self-exhibited type, and (d) self-centered type. Among these types, going my way and self-exhibited types were seen showing higher scores in mental set scale for creativity.

Key words : need for uniqueness, Uniqueness Scale.

問題と目的

Snyder & Fromkin (1980) によって提唱された「独自性理論」(Theory of Uniqueness) では、人間の基本的な欲求として、「他者とは異なるユニークな存在でありたい」という独自性欲求 (need for uniqueness) をその中核に据えている。これに関する研究の概要は、岡本 (1982, 1985) に譲るが、人間存在の根本に関わる興味深い理論である。我国では、Okamoto (1983), 岡本 (1985) がこれに関する先駆的な研究を行っている。まず、Okamoto (1983) は、Fromkin (1970, 1972) に基づいて、この理論に関する基礎的研究を行い、性格や態度、興味に関して「他の人と非常に類似している」という内容のフィードバックを受けた人は、「類似度が中程度」という内容のフィードバックを受けた人に比べて、より否定的な情動を体験していることなどを報告している。また、岡本 (1985) は、Snyder & Fromkin が作

成した独自性欲求を測定する尺度を我国に導入し、その信頼性や妥当性について検討している。この尺度は、上記のようなフィードバック・パラダイムとともに、その個人差をとらえる主要な測定具と考えられ、信頼性と妥当性を我国において、吟味することが目的とされた。そして、この尺度が測定しているものは、1つの概念としてまとまりを持つ安定した個人差に関わる変数であること、高い信頼性と妥当性が得られたことなどが報告されている。

しかし、岡本 (1985) の独自性欲求尺度の因子分析の結果や、大学生64名を対象とした筆者らの予備調査の結果(「独自の人とはどのような人だと思いますか?」との問に対して箇条書的に回答) などから考えて、質的に違いのある独自性欲求のタイプが存在することも考えられる。予備調査の回答例を列挙すると、①自分なりの意見を持っている人、②自分の個性を把握している人、③物事を色々な側面から見るができる人、④他人を気にしない人、⑤まわりの人に流されない人、⑥人を笑わせる人、⑦型破りなことをする人、⑧自分の思う通

* 千葉大学 (Chiba University)

りに動く人, ⑨自分のやりたいことができる人などとなり, これらの回答から「独自の人」をとらえる視点を探索した。そして, 第1に, ④や⑤, ⑧, ⑨のように他人の存在をそれほど意識しないか, それとも⑥のように他人の存在にとらわれやすいかという視点, 第2に, ①や②, ③のように行動というよりもその人の意識や認識のレベルを強調するか, それとも, ⑦や⑧, ⑨のように積極的な行動を強調するかという視点, の2つが導き出された。本研究では, この予備調査の結果を参考にして, 独自性欲求というものを, I「他者の存在を気にするか否か」, II「自己を積極的に表出するか否か」という2つの視点(次元)からとらえ, 仮説的に FIG. 1 に示す4類型を設定した。

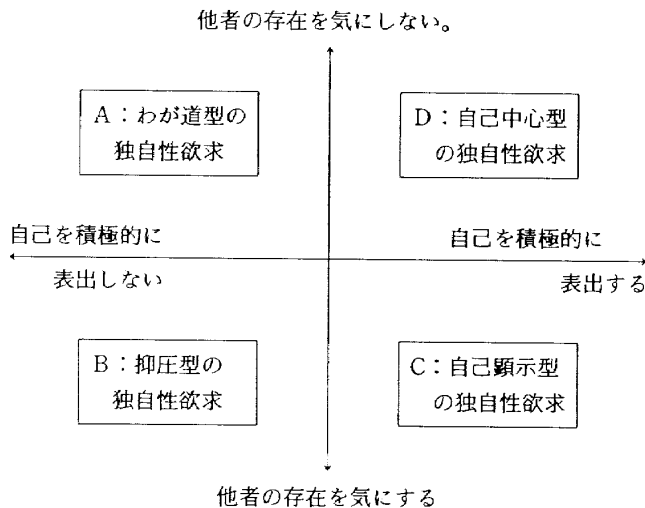


FIG. 1 独自性欲求の類型

本稿では, 上記のような独自性欲求の類型化が可能であるか否か検討するとともに, それぞれの類型の特徴を探索的に検討することを目的とした。

方 法

調査対象 国立C大学学生 224名

調査時期 1987年10月上旬

調査方法 以下の3種の質問紙を授業時間を利用して集団的に実施した。

質問紙 (1)独自性欲求を測定する質問紙: 上記2つの次元それぞれを測定すると考えられる項目を増田(1988)が作成した。筆者ともう1名の研究者がその内容的妥当性を吟味し, 意見の一致をみた TABLE 1 に示す18項目を選択した。回答は7段階評定によりなされ, 各項目とも, 他者の存在を気にしないほど, あるいは

自己を積極的に表出するほど高得点となるよう7~1点を付与した。

TABLE 1 新しい独自性欲求を測定する項目の項目-全体得点間相関係数

①	引込みじあんである。++注2)	.495**
②	自分に対する他人の評価が気になる。+	.655**
③	型にはまったことをするよりかわったことをしたい。++	.377**
④	ついつい自分と他人を比較してしまう。+	.598**
⑤	誰からも嫌われたくない。+	.552**
⑥	我を通すことはあまり好まない。++	.374**
⑦	他人が自分に反対するといやな気持ちになる。+	.445**
⑧	人の話をきくより自分で話したい方だ。++	.177**
⑨	世間体はそれほど気にしない。+	.556**
⑩	いつでも積極的に自分の意見を述べる。++	.478**
⑪	他人の行動にはあまり関心がない。+	.361**
⑫	人に見られているとつかうつけしてしまう。+	.345**
⑬	恥ずかしがりやである。++	.400**
⑭	人から「生意気だ」とか「うぬぼれている」とか言われたことがある。++	.231**
⑮	自分の容姿を気にする方である。+	.323**
⑯	自分の長所をできるだけアピールしていきたい。++	.015
⑰	私は○○さんよりは優れていると思っている。++	.159**
⑱	他の人に自分のことを認めてもらいたい。+	.343**

注1) ○印は逆転項目を示す。 ** p<.01

注2) + : 他者の存在を気にするか否かの次元を測定する項目。

++ : 自己を積極的に表出するか否かの次元を測定する項目。

(2)独自性欲求尺度: 併存的妥当性を検討するため, 岡本(1985)が翻訳・作成した独自性欲求尺度32項目をそのまま使用した。7段階評定とし, 各項目とも得点が高いほど独自性欲求が高くなるよう7~1点を付与し, 総得点を算出した。

(3)創造的構えテスト: 独自性欲求との関連を検討するために使用された。三島・久米・青柳・星野・吉光(1985)により作成され, 6下位尺度68項目からなる。下位尺度は, ①自己信頼感, ②持久力, ③挑戦性, ④探求心, ⑤細心さ, ⑥客観性の6つである。回答は7段階評定とし, 各項目とも創造的構えの程度が高いほど高得点となるよう7~1点を付与し, 各下位尺度得点ならびに総得点を算出した。

結果と考察

1. 新しい独自性欲求尺度(ユニークさ尺度)の作成

(1)項目分析 作成した18項目について, 各項目得点と総得点との相関係数算出により項目分析を行い, その結果を TABLE 1 に示した。この結果に基づき, 有意に達しない項目No16を除外, 残りの17項目を採択した。

(2)因子分析 項目分析を通過した17項目について、主因子解による因子分析を行った。それによれば、各因子の固有値は、第Ⅰ因子3.45、第Ⅱ因子2.65、第Ⅲ因子1.30、第Ⅳ因子1.17、第Ⅴ因子1.09などとなり、第Ⅰ因子、第Ⅱ因子と第Ⅲ因子以下とは明らかに差が認められた。そこで、2因子構造を採用し、これにVarimax回転を施し、TABLE 2に結果の概要を示した。ここで、絶対値.35以上の因子負荷に着目し、単純構造をなす項目を選択すると(No17の項目は第Ⅰ因子、第Ⅱ因子の負荷量の差が小さく除外)、第Ⅰ因子(FⅠ)は、No2, 4, 5, 7, 9, 11, 12, 15, 18の9項目が、また、第Ⅱ因子(FⅡ)は、No1, 3, 6, 8, 10, 13, 14の7項目がそれぞれ選出された。第Ⅰ因子は、「他者評価からの自由」の因子、第Ⅱ因子は、「積極的自己表出」の因子と各々命名された**。第Ⅰ因子が、「他者の存在を気にするか否か」、第Ⅱ因子が、「自己を積極的に表出するか否か」に対応する次元であり、これらは独立した2つの次元であることが確認された。以下、単純構造をなす項目(TABLE 2にイタリックで表示)の総和により、それぞれ因子得点を算出した。この尺度を「ユニークさ尺度」と呼ぶ。

TABLE 2 因子分析の結果

No	因子負荷量		h ²
	FⅠ	FⅡ	
1	-.125	-.681	.480
2	-.715	-.258	.578
3	.147	.447	.221
4	-.739	-.079	.552
5	-.655	-.029	.430
6	-.055	-.547	.302
7	-.495	-.110	.257
8	-.201	.413	.211
9	.632	.172	.429
10	.098	.754	.579
11	.408	.051	.169
12	-.517	.245	.328
13	-.130	-.510	.278
14	-.087	.378	.150
15	-.515	.104	.276
17	-.298	.391	.242
18	-.595	.296	.442
寄与率	19.92(%)	14.92(%)	34.84(%)

** 2因子の寄与率の合計が若干低いのは、因子数の制限による
ところが多い。3因子構造以上を採択すれば、寄与率は大幅
に上がるが、固有値との兼ね合いで3因子以上の因子を採択す
ることは不可能であった。

(3)信頼性 ユニークさ尺度の16項目について、スピ
アマン・ブラウンの公式による信頼性係数(前後折半)
を算出したところ、.720の値が得られ、この尺度の内的
整合性に基づく信頼性は低いといえよう。

(4)妥当性 ユニークさ尺度の2つの因子(次元)なら
びに総得点と岡本(1985)の独自性欲求尺度との相関係
数を算出し、TABLE 3に結果を示した。その結果、い
ずれも正の有意な相関が得られ、本尺度の併存的妥当
性の低いことが検証された。

TABLE 3 ユニークさ尺度の妥当性の検討

独自性欲求尺度		相関係数（r）
ユニークさ尺度		
F I（他者の存在を気にするか否かの次元）		.635**
F II（自己を積極的に表出するか否かの次元）		.339**
合	計	.641**

** p<.01

以上、新しい独自性欲求尺度(ユニークさ尺度)の作成
を行い、独自性欲求を4つの型に分類する可能性が示
唆された。

ところで、人間存在の本質と結びついたこの独自性
欲求を充足することで、人はより生き生きとした精神
的活動を行うことができるであろう。そのことは、活
発な創造への意欲も生み出すことであろう。従って、
独自性欲求のタイプと創造性(本研究でとりあげるのは、創
造性の人格的基礎をなすと考えられる「創造的構え」)には、密
接な関係が見られることが予想される。そこで、次に、
「創造的構えテスト」との関連において、これら4つの
類型の特徴を若干明らかにしていくこととしたい。
FIG. 1には各類型の暫定的な名称も付されている。こ
れら4つの類型の価値づけは難しい点もあるが、これ
らのうちでは、A型すなわち、「わが道型の独自性欲求」
のタイプが対人関係にそれほど悩まされずに、もの静
かに自分の目標を着実に実現させていくという印象で、
独自性欲求の表出の仕方(あり方)としては、最も成熟
した類型のように思われる。一方、他の類型は、「まだ
自分自身や他者にとらわれている」面があり、A型よ
りも「創造的構え」において低い得点を示すことが予
想される。

2. 独自性欲求と創造的構えとの関連

ユニークさ尺度の2つの因子得点の平均(それぞれ
27.23, 28.90)をもとに、FIG. 1に示すA~Dの4類型に
分類し、この4群の「創造的構え」の6下位尺度なら

びに総得点の差違を一要因の分散分析により検討した。その概要をまとめたものが、TABLE 4 である。それによれば、「自己信頼感」($F=24.62, p<.01$), 「持久力」($F=3.14, p<.05$), 「探求心」($F=7.31, p<.01$) の3つの下位尺度及び「総得点」($F=4.72, p<.01$) において4群間に有意差が認められた。また、これら有意差の得られたものについて、Ryan 法による多重比較を行い、結果をTABLE 5 にまとめて示した。TABLE 5 より、「自己信頼感」の得点は、A型がB, D型よりも、また、C型がB, D型よりも有意に高かった。「持久力」においては、分散分析では有意差は見られたものの、多重比較の結果、いずれの2群間にも有意差は認められなかった。「探求心」の下位尺度では、A, C型がD型より有意に得点は高かった。また、「創造的構え」の総得点においては、「自己信頼感」の下位尺度と同様、A, C型がB, D型よりもそれぞれ有意に高い得点を示した。

TABLE 4 4 類型の創造的構え得点の平均と分散分析の結果

類型 創造的構え	A(N=64)	B(N=63)	C(N=44)	D(N=53)	F 値
自己信頼感	65.31 (7.59) ^a	56.81 (8.02)	66.27 (8.70)	56.87 (6.65)	24.62**
持久力	54.72 (9.55)	52.89 (8.91)	51.27 (10.15)	56.53 (7.69)	3.14*
挑戦性	45.77 (7.21)	43.24 (6.87)	45.75 (7.51)	43.77 (7.39)	1.19
探求心	53.75 (6.94)	51.75 (6.55)	54.98 (6.99)	49.06 (6.94)	7.31**
細心さ	40.53 (5.34)	41.62 (4.48)	41.14 (5.45)	42.17 (4.01)	1.21
客観性	46.66 (6.07)	44.67 (6.37)	46.77 (6.50)	46.11 (5.79)	1.45
合計	306.73 (27.51)	290.97 (27.32)	306.18 (32.85)	294.51 (25.56)	4.72**

注) 下段の数値はSD ** $p<.01$ * $p<.05$

TABLE 5 多重比較の結果 (左の型-右の型の t 値)

類型 創造的構え	A-B	A-C	A-D	B-C	B-D	C-D
自己信頼感	6.19*	-0.63	5.87*	-6.22*	-0.04	5.96*
持久力	1.13	1.94	-1.07	0.92	-2.15	-2.84
探求心	1.67	-0.92	3.69*	-2.40	2.11	4.24*
合計	8.33*	0.26	6.17*	-7.26*	-1.78	5.37*

* $p<.05$

上記の結果をまとめると、創造的構えの得点においては、全般的にA型やC型がB, D型よりも有意に高いといえそうである。A型がB, D型に比べ得点が高いという結果は予想を支持するものであった。A型とC型の間に差が見られなかった原因としては、C型の特徴を再吟味することによって理解できる面もあろう。つまり、C型は、FIG. 1 にあるように、自己表出を盛んに行うが、それはあくまでも、「他者の存在を念頭に置いた上で」行われるのである。他者の存在に気を配りながら、それに応じて自己表出を行うわけである。これは、独自性欲求表出の観点からは、かなり健全なタイプといってよいかもしれない。それ故、「創造的構え」の「自己信頼感」などの下位尺度や「全体得点」において、A型と同程度の得点を示したのではなかろうか。当初は、C型のこの特徴を軽視していたために、このような結果は予想できなかったが、こうして見てくると、C型が「人を気にしつつ自己表出をしない」B型や、「人を見ずに一方的に自己表出をする」D型に比べ、より高い「創造的構え」得点を示したことはかなり理解できるように思われる。また、予想した通り、B型とD型の間には「創造的構え」得点に差は認められなかった。B型は周囲の人のことが気になる余り自己の表出が抑制されているタイプ、D型は他者とは無関係に一方的に自己表出を目指そうとするタイプであり、いずれも独自性欲求表出の仕方としては未熟なタイプといえよう。B型やD型から脱し、A型やC型に移行することが、独自性欲求表出の仕方としてはより成熟したものであり、そのようなタイプに移行することによって、自己の内面を十全に表現できるだけの健全な創造的活動が可能になるということであろう。

なお、本研究では、FIG. 1 の4類型の分類は、サンプルの平均値に基づいて行った。今後、より被験者を増やすことにより、①標準偏差を加味した分析を行うこと、②各類型のより明確な判定基準を作成することなどが課題となろう。

引用文献

- Fromkin, H.L. 1970 Effects of experimentally aroused feelings of undistinctiveness upon valuation of scarce and novel experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 521-529.
- Fromkin, H.L. 1972 Feelings of interpersonal undistinctiveness: An unpleasant affective state. *Journal of Experimental Research in*

- Personality*, 6, 178-182.
- 増田浩子 1988 現代青年の独自性欲求に関する一研究 千葉大学卒業論文（未公刊）
- 三島正英・久米稔・青柳肇・星野美智子・吉光清 1985 創造的構え（MSC）の安定性について ―中1時と中2時の比較― 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 782-783.
- 岡本浩一 1982 “独自性理論”における類似性に関して 心理学評論, 25, 165-177.
- Okamoto, K. 1983 Effects of excessive similarity feedback on subsequent mood, pursuit of difference, and preference for novelty or scarcity. *Japanese Psychological Research*, 25, 69-77.
- 岡本浩一 1985 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究, 56, 160-166.
- Snyder, C.R., & Fromkin, H.L. 1980 *Uniqueness : The human pursuit of difference*. New York : Plenum Press.

付 記

本稿は、筆者の指導に基づく増田（1988）の資料を再構成して、筆者の責任のもとに発表するものである。
（1990年8月11日受稿）